

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ⑪ ～参観者への思いが溢れる語り合い～

部落の仲間の悲しみを受け止めて思うこと

部落差別をわがこととして、一人ひとりが語り合う中で、「部落出身であることを知った時、死んでしまいたいと思った」という仲間の言葉は、会場の教室に広がり、一人、また一人と語りを繋げていった。

そして、全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業（以下全道研）での「授業者が部落の人だからあんなに頑張られて、あんな授業ができるというようなささやきをした教師がいた」ことについて、様々に参観者へのメッセージが出されていった。

K・Tの語り

「部落差別への嘆きを怒りに変え、語り合うことにより人間は変わる」

誰でも自分の苦しい部分を語っていくということは、苦しくつらいことだと思います。けど、その苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。

私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この同和問題の学習を積み上げてきて思うことは、歎くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変わるということがわかりました。

S・Eの語り

「部落問題に対して本気で取り組んでいる誇りが私たちにはある」

全道研の終わったときに「先生が部落の人だからあんなに頑張られて、あんな授業ができるというようなささやきをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は同和問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやさしかったです。

K・Kの語り

「部落問題は、先生こそが本気で取り組んでいかなければならない」

私もS・Eさんと同じで、先生から先生が部落出身だから、そんなに一生懸命なんじゃと聞いたとき、すごく頭にきて、生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるんかなと思いました。部落問題は、先生こそが本気で取り組んでいかなければならないと思います。

Y・Iの語り

「部落問題学習は部落の人のためではなく自分自身のために取り組んでいる」

私も先生から話を聞いたとき、すごくやさしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかったとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのだと思います。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなく自分自身のために、この問題の学習に取り組んでいるつもりです。

K・Hの語り

「さりげない言葉であってもその人を絶望させる現実を自覚してほしい」

全道研の授業のとき、先生をあの人には部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけで、この部落問題が大変な差別の問題であるという自覚がないんだと僕も思いました。さりげない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだって起こってきた、この差別の問題をすべての先生が、もっともっと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

